

Title	「負債」を通じた新たな災害ボランティア論の構築
Author(s)	大門, 大朗
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/72472">http://hdl.handle.net/11094/72472</a>
DOI	
rights	「大門大朗, 渥美公秀. 災害時の利他行動に関する基礎的シミュレーション研究—1995年と2011年のボランティアでは何が違ったのか—. 実験社会心理学研究. 2016, vol.55, no.2, p.88-100.」の著作権は日本グループ・ダイナミックス学会が所有する。
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 論文内容の要旨

氏名 (大門大朗)

論文題名 「負債」を通じた新たな災害ボランティア論の構築

## 論文内容の要旨

本論文は、支援の「受け入れ」に着目した研究と、「お返し」に着目した大きく二つの研究から構成されている。「はじめに」では、本論文の導入部として、熊本地震直後の現状を記した。第1章では、災害ボランティアが抱える問題について、国内のボランティアの問題、アメリカの社会科学の紹介、支援者からの研究の偏重と「被災者－支援者」という二項対立の枠組みを問い直すような動きが見られることを明らかにした。その上で、災害ボランティアにおいて、支援がもたらす贈与と負債に関する研究が少ないことを指摘し、研究背景を記述した。第2章では、前章を承け、「受け入れ」と「お返し」という立場から災害ボランティアを捉え直し、贈与と負債に着目した新たな災害ボランティア論を提示することを本研究の目的として提示した。

「受け入れ」に着目した第3章では、始めにどのような要因で誰が災害ボランティアを行っていたのかを明らかにする社会調査を用いた研究（3.1.1節：個人レベルの決定要因）と災害ボランティアを受け付ける災害VCの事例研究（3.1.2節：環境レベルの決定要因）の二つの研究を行った。4.1節からは、社会調査から個人レベルの要因として社会的なつながりが強く影響していたこと、シミュレーションからは環境レベルの要因として、近傍要因と遠隔要因の二つ要因が存在することが明らかになった。4.2節では、2016年の熊本地震後の益城町災害ボランティアセンター（VC）の事例研究を行い、「支援者」「被災者」というフォーマルな関係が、現場レベルでは災害ボランティアの受け入れの矛盾を引き起こしていることを、エスノグラフィーを用いて明らかにした（3.2.1節）。さらに、二つの災害VC（益城町・西原村）の組織論的な比較研究からは、単に災害VCの方針だけでなく、他のボランティア団体やネットワーク団体らの動きといった地政学的要因が災害VCの運営に影響を与えていることが明らかになった。

「お返し」のダイナミックスの着目した第4章では、三つの研究を行った。4.1節では、「以前に災害時に助けられた経験」が東日本大震災時の支援全般（e.g. 募金・寄付、物資の送付、支援グッズの購入、被災地への旅行、災害ボランティア）にポジティブに影響を与えたことがマルチレベル潜在クラス分析から明らかになった。4.2節では、セル・オートマトンを用いて、「被災地のリレー」に閾値があり、それを超えれば広がりうる可能性を「共感モデル」によって示した。4.3節の実践研究では、熊本地震後の安永仮設住宅における二つの実践（おにぎり交流会・はるかのひまわり）についてエスノグラフィーを用いて記述し、被災地のリレーを駆動するためにモノを媒介物として利用する実践可能性についてアクターネットワーク理論から分析し、提示した。

第5章では、第3章・第4章で議論した「受け入れ」と「お返しの研究」から、「支援者－被災者」という二項対立の枠組みを批判的に捉え直し、支援を円滑化するための新たな回路を提示した。これまでの回路が、第三者的な媒介を立てることで負債を否定し、支援を円滑化させるという方略であった「負債の否定回路」を構築するものであったのに対し、本論文は、支援がもたらす負債を引き受けながらも支援を円滑化させる方略を示した（負債の肯定回路）。最後に、ここまで災害ボランティアに対して行った議論を総合し、新しい災害ボランティアの像を提示するとともに、現代社会において相互扶助的な社会を構築するための考察を行った。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 大門大朗 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 渥美公秀
	副 査 教授 稲場圭信
	副 査 講師 山田一憲
<p><b>論文審査の結果の要旨</b></p> <p>本論文は、日本における災害ボランティアについて、支援を受けることによる負い目としての負債感情をもとに、被災者がボランティアへと参入するための新たな実践・理論を提示したものである。特に、支援者側からの考察が中心的な先行研究に対して、本論文は、支援の「受入れ」について、そして、支援の「お返し」について着目し、質的・量的に捉え直すことで、支援の役割がダイナミックに変容していく過程を考察しているものである。</p> <p>第1章において、支援を「受入れる」側面と「お返しする」側面にアプローチすることで、支援者と被支援者という二項対立の枠組みを捉え直し、ボランティア論を更新することが目的として提示されている。第2章では、本研究の目的を踏まえ、日本国内の災害ボランティアの課題について、災害後の人々の行動に関する研究が盛んなアメリカの災害研究との比較研究を通じ、網羅的に検討されている。その中で、国内外ともに、支援者の役割に関して、時間的な変容過程を捉えた研究が欠落しているという問題提起がなされている。</p> <p>第3章では、受け入れの側面に捉えた研究がなされる。はじめに、受入れたボランティアの規定要因について、大規模社会調査から、社会的資源理論が災害ボランティアを予測する要因として整合的であることが明らかにされ、セル・オートマトンを用いたシミュレーションから、遠隔要因と近傍要因という2つの環境要因が、社会全体のダイナミクスを規定していることを明らかにしている。第二に、受け入れる被災地の状況について、2016年の熊本地震での、災害ボランティアセンターにおける、フィールドワークとインタビュー調査の結果から、被災者がボランティアを受け入れる中で直面する、「被災者－支援者」のねじれがもたらす問題について「二重の疎外」として提示した。さらに、西原村の災害ボランティアセンターとの組織論的な比較分析から、自律・即興的なモデルが必要であることが提示される。</p> <p>第4章では、支援をお返しする側面から捉えた3つの研究がなされている。はじめに、大規模社会調査のデータから、東日本大震災以前に災害で助けられたことのある経験が、災害ボランティアを含む、募金・寄付、被災地への旅行など多様な支援を高めていることが、マルチレベル潜在クラス分析の結果から実証される。第二に、支援された経験が将来の災害においてボランティア行動の割合を高めるかどうかについて、「共感モデル」を組み込んだセル・オートマトンによるシミュレーションにより、閾値が存在し、支援が広がりうる可能性が提示される。最後に、そうした支援が広がるための実践手法について、「はるかのひまわり」と「おにぎり交流会」という2つの事例から考察し、モノを介したグループ・ダイナミクスの実践について提示している。</p> <p>終章である第5章では、支援が時間的に媒介されていく理論的背景に、負債感覚があることが指摘される。しかし、先行研究は、負債が被災者やボランティアに直接的に現れないようにする「被災の否定回路」を構築する試みに加担しがちであることが整理される。そして、負債を積極的に引き受ける「負債の肯定回路」を構築する新たなボランティア論の可能性が提示されている。</p> <p>以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。</p>	